

自閉症幼児の発達と保育 — 発話行為と人物描画との連関性に着目して —

田中 道治*・富森 和美**・小林 哲美**・門馬 かすみ**・小島 龍司**

Development and Early Interventions in Infant with Autism
— Focusing on Interaction between Utterance and Drawing —

Michiharu TANAKA, Kazumi TOMIMORI, Tetsumi KOBAYASHI, Kasumi MONMA and Ryuji KOJIMA

Accepted July 24, 2009

抄録：発達的に自閉症児は運動及び動作（手指操作）の発達機能に比べて、言語・認識機能の遅れが顕著である。このような発達の特徴は「発達の層化現象」と呼ばれ、その解消あるいは軽減を目的にした療育・保育・教育が進展してきた。しかしながら、現在、この発達における諸機能連関のメカニズムあるいはプロセスはほとんどわかっていないと言ってもよいであろう。本研究では、さらに自閉症幼児の発達の諸機能連関を形成発展させるための手がかりを得るために、動作及び言語・認識機能の関係を保育実践の成果をもとに事例的に検討した。その結果、動作（人物描画）に含まれる発達機制が言語・認識機能（発話行為）に積極的に影響を及ぼしていることが明らかにされた。すなわち、「顔」から「人」への描画の発達が二次元可逆操作の操作特性を有しているが、この活用が話し言葉における二語文産出（二次元形成）に関係していた。

索引語：自閉症，発達機能，諸機能連関，人物描画，発話行為

Abstract : As a development characteristic in children with autism, as compared with motor and manipulation, the functions of language and cognition are delayed. The purpose of early intervention for the autistic is to integrate each of the developmental functions, but little is understood of the mechanism of integration in developmental functions. This study aims to clarify how drawing a man developmentally interacts with utterance in infant with autism. The main result was that the developmental change from “Face” to “Person” in the drawing a man influenced the occurrences of utterance that included two words sentences.

Key Words : Autism, Development, Drawing a man, Utterance

* 発達障害学科

** 京都市西嶺保育園

1. はじめに

自閉症児の発達特性として、運動機能及び手指操作（動作）機能に比べて言語・認識機能の発達の遅れが指摘されている。長嶋（1981）は発達の諸機能連関性の問題として、「層化現象」の概念で自閉症の発達を説明している。つまり、自閉症児では言語発達が他の発達に比べて低次の発達階層（例えば運動や動作は次元可逆操作の幼児期の発達階層に達しているが、言語が回転可逆操作の乳児期前半、あるいは連結可逆操作の乳児期後半の発達階層にある）にとどまり易く、発達機能間にズレが生じる。

自閉症児の特異な発達特性を踏まえて、治療教育の観点から太田・永井（1993）は言語・認識機能と密接な関係をもつ表象機能の発達に焦点を当てて認知発達治療プログラムを開発し大きな成果をあげた。田中・松長（1995）は、就学前の自閉症幼児を対象にして、発達の諸機能連関の改善に向けた療育・保育プログラムを作成した。それは主にリズム運動を中心にして、認知課題（パズル、描画、手遊び、積み木構成、折り紙、粘土遊びなど）、言語・社会性課題（言葉遊び、絵本の読み聞かせ、紙芝居、なかま集め、電話ごっこなど）から構成された。約2年間の実践の結果、リズム運動における4種のリズム成績間に正の相関が示され、同時にリズム課題と言語課題との間にも正の相関傾向が認められた。このことは特に後者に関して、リズム事態で身体全体を活用した動きのなかで他者を模倣したり、他者と協調したり、あるいはリズム同期することによって言語・認識機能が活性化していることを示唆する。

リズム運動と言語・認識機能との関係については、自我（自己意識）の観点からも考察されよう。発達の諸機能連関性を統制するのは自我（自己）の発達である。それは、「自我の誕生」「自我の拡大」「自我の充実」「自尊心・自制心の芽生え」「自制心の育ち」、そして「多面的な自己評価」へと幼児期の間に発達変化すると考えられている（田中・田中，1986）この点、自己の成立過程を自己鏡像認知から検討した赤木（2007）は、自閉症児では自我の誕生を示す「自発的にマークに触るもの」が50%程度であり、形式的な自己理解の面で遅れがあることを指摘した。そして、彼は自閉症児では理解した自己に主体的に関与していくところに困難があり、行為主体としての自己感を高める保育の必要性を議論している。したがって、リズム運動が発達の諸機能連関性に密に関与していることに関しては、リズム運動に含まれる模倣、協調、そしてリズム同期が行為主体としての自己感を強く形成し、その結果、言語・認識機能が活発に展開したものと思われる。

以上から本研究では、田中・松長（1995）の実践研究の知見を踏まえ自閉症幼児における言語・認識機能（発話）と手指操作機能（人物描画）の連関性及びその発達的变化を検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象児 Y児（男児 保育開始時 1歳7ヶ月）

①生育歴 主な生育歴は次の通りである。

出生時体重 3,460g、首のすわり 2ヶ月、寝返り 4ヶ月、座位 7ヶ月、
ハイハイ 9ヶ月、つかまり立ち 9ヶ月、つたい歩き 10ヶ月、独歩 10ヶ月。

②障害の診断 2歳10ヶ月時に自閉症と診断される。

③行動特性 入園後の行動特性を示すと、表1の通りである。入園後、約1年間は多動を中心にし

て他害行動及び自傷行動などの問題行動を頻繁に示し、集団活動はまったくできなかった。しかしそれ以後 Y 児は少しずつ問題行動を減少させて保育士との相互作用を築きつつ、乳児期後半から幼児期前期の発達を含む行動特性を示すように変化していった。

表 1 入園後の行動特性

	運動	手指操作	言語	(問題行動)
一 歳 児 ク ラ ス	・動き回る			・他害（他児の髪を引っ張る 噛む） ・自傷 ・異物を飲み込む ・常同行動 ・多動
二 歳 児 ク ラ ス	・動き回る ・ジャングルジム遊び ・ボール遊び（投 蹴 受け） ・階段の昇降（手すり）	・描画（顔） ・折り紙 のり付け ・ハサミで紙を切る（チョキン） ・服をたたむ ・スプーンから箸へ ・絵本のページをめくる ・ストロー使用	・無意味な発声	・他害 ・偏食 ・多動
三 歳 児 ク ラ ス	・階段の昇降（支えなし） ・平均台（介助）	・描画（顔、胴体、手足） ・ハサミで線を切る ・折り紙（模倣） ・粘土遊び（へび） ・服をきれいにたたむ	・発声がさかんになる ・一語発話（「ポッポー」 ＜汽 車＞, 「キ ャ ッ キ ャ」＜サル＞） ・身ぶり（口に指を当て、 シー） ・指さし（定位）	
四 歳 児 ク ラ ス	・友達と手をつなぎ歩く	・絵本の内容を踏まえて ページをめくる	・アンパンマンの表情を 喜ぶ ・一語発話多数 ・指さしながら名前を言 う ・二語発話	・多動減少

(2) 保育方法

- ①保育内容 月曜日から土曜日まで年齢相当のクラスで保育を受ける。主な保育内容及び保育上の留意事項は表 2 に示される通りである。

表 2 保育内容及び保育上の留意事項

主な保育内容		保育上の留意事項
一 歳 児 ク ラ ス	・音楽遊び ・自由遊び	・自傷行為及び他害行動に気を付け見守り，特に他児との相互作用には注意する ・言葉かけを欠かさない ・身辺処理の自立のために繰り返して介助する ・全身を使う遊びに誘導する ・手指操作を活発にさせる（描画，積み木構成など） ・連絡帳を利用して家庭との連携を密にする
二 歳 児 ク ラ ス	・絵本の読み聞かせ ・自由遊び	・他害行動に気を付け他児との交渉を深める ・言葉かけを多くする ・集団活動に誘うが，入らない時には興味・関心の強い遊びに加配保育者がかかわる ・身辺処理の自立のために指導を繰り返す ・連絡帳を利用して家庭との連携を密にする
三 歳 児 ク ラ ス	・身辺処理の自立 ・言葉を使った他者とのコミュニケーション ・手遊び ・音楽遊び ・年長児との合同遊び ・ごっこ遊び ・運動遊び ・行事に参加する	・他害行動に気をつける ・言葉かけを多くする ・加配保育者と 1 対 1 でかかわる（本児の遊びに積極的に介入し遊びを展開する） ・偏食をなくす ・集団活動に誘う ・連絡帳を利用して家庭との連携を密にする
四 歳 児 ク ラ ス	・音楽遊び ・行事に参加する ・絵本や紙芝居を他児と一緒にみる	・集団の中で活動が長く続くように加配保育者が気をつける ・禁止マーク（「×」）を理解させる ・指さし理解を促し，保育者の意図を知らせる

(3) 保育期間

1 歳 7 ヶ月～5 歳 1 ヶ月（3 年 6 ヶ月）

3. 発達経過

(1) 発達検査の結果からみた発達特性の変化

新版 K 式発達検査の結果による Y 児の発達経過は次の通りである。表 3 に示されるように，2 歳 3 ヶ月時点では全体として DA1 : 7 であり，幼児期前期の発達レベルであるが，言語・社会領域は DA0 : 8 であり乳児期後半に入ったばかりであり，発達機能間のズレが顕著である。検査場面では，歩き回り，室外に出るなど課題定位が困難である。対人的疎通性が極めて乏しいなかで，「積み木の塔 8」及び「円

板回転」がプラスであり、二項関係の成立は観察された。

表 3 Y 児の第 1 回検査結果

CA2 : 3		
領域別	発達年齢 (DA)	発達指数 (DQ)
姿勢・運動 (P-M)	1 : 8	74
認知・適応 (C-A)	1 : 10	81
言語・社会 (L-S)	0 : 8	30
全領域	1 : 7	70

4 歳 4 ヶ月時には、Y 児は日常生活の場面で一語文による発話が可能になってきており、表 4 に示されるように、全体として DA1 : 10 であり、言語・社会領域の改善（特に「絵指示」(+) であり、近くの指さしを獲得して共同注意行動を発達させてきている）が認められた。この言語・認識機能の発達では未だ一次元可逆操作期には達していないが、第三者を指さし（「定位の指さし」）で第二者と共有するといった三項関係を確立しつつある。認知・適応領域は DA2 : 1 であり、「形の弁別Ⅱ」(+), 「入れ子 5 個」(+) であり表象の維持及び企画制御能力の芽が育ちつつあると言える。

表 4 Y 児の第 2 回検査結果

CA4 : 4		
領域別	発達年齢 (DA)	発達指数 (DQ)
姿勢・運動 (P-M)	1 : 8	38
認知・適応 (C-A)	2 : 1	48
言語・社会 (L-S)	1 : 3	29
全領域	1 : 10	42

表 5 に示されるように、5 歳 1 ヶ月時では全体として DA3 : 3 であり、幼児期中期の発達レベルに達している。日常生活の場では二語文を活用してコミュニケーションも可能になっているが、「大小比較」及び「長短比較」は共にマイナスであり、比較概念の獲得の難しさを示し自閉症特有の発達特性が観察された（太田・永井，1993）。これに対して、認知・適応領域では「門の模倣」及び「正方形模写」が共にプラスであり、手指操作レベルで既に二次元可逆操作の操作特性を獲得している。

表 5 Y 児の第 3 回検査結果

CA5 : 1		
領域別	発達年齢 (DA)	発達指数 (DQ)
姿勢・運動 (P-M)	(上限 3 : 6)	—
認知・適応 (C-A)	3 : 7	70
言語・社会 (L-S)	2 : 8	52
全領域	3 : 3	64

(2) 言語行動及び手指操作の発達の連関性の分析

発話行為に着目して、言語行動の発達を中心に Y 児の発達経過を 4 つの時期に区分した。表 6 に示されるように、Ⅰ期は入園（1 歳 7 ヶ月）から 3 歳前半までに当たり、表出言語を持たず、多動であり、問題行動を頻繁に示していた。発達的には言語・認識機能は乳児期前半から後半に入ったところ（DA8 ヶ月）であり、運動及び手指操作の発達とのズレが大きく層化現象を示していた。保育者との相互交渉ではクレール行動が中心であった。また集団活動場面では一人皆からはずれてしまうことが多かったが、他児への関心を持ち周辺をウロウロしていた。

Ⅱ期に入って、3 歳を過ぎた頃から指さし行為を用いて保育者との相互作用を引き出し、シンボルカード（「×」カードであり禁止の意味）を理解するようになった。この共同注意及び三項関係の成立の兆しはシンボル表象機能の発達の証しであるが、それを支えているのが手指操作機能の発達であると考えられる。図 1 に示されるように、人物描画知能検査の結果、円のなかに目、口、その他の 2 方向性をもったものを描いて「顔」にしている。これは描画知能レベルで MA3 歳 6 ヶ月、IQ98 を示しており、描画（動作）と意図とが絡みはじめていると考えられる。この動作レベルの発達は 4 歳から 4 歳前半にかけて表出されてきた一語文（「ポッポ」「キャッキャ」「シー」など）の産出の発達の基礎を与えている。表出言語としてみれば限られたものであるが、音声と対象とが対応して定位の音声と呼ばれるものに変化し、同時にそれらが保育者との絵本読み場面で発せられ、可逆的音声としての性質をもった言語行動となっている。このようにⅡ期においては言語・認識機能の発達は乳児期後半の一次元形成を特徴としており、人物描画を中心とした動作機能は二次元形成を達成し、同時に言語・認識機能を支えている。

Ⅲ期は 4 歳後半の間と考えることができる。Ⅱ期のしめくくりとして数語ではあるが一語文を獲得した Y 児はⅢ期に入って語い量を少しずつ増加させた。身近な人の名を分化させ（「パパ」「ママ」「せんせい」など）、要求を言葉（「やって」）で表現し、そこに気持ちをつなげていった。このような自らの要求を他者に発し、状況を保育者に伝えることのなかに気持ちをつなげていき二語文が準備されていたと考えられる。このことは友達と手をつないで散歩したり、保育者に絵本を読ませたり、絵を描かせたりすることを繰り返すなかで実現したものである。Y 児の二語文の準備を支えているものの一つは手指操作機能の発達である。Ⅲ期に入ってすぐの人物描画が図 2 である（CA4:5; MA4:1, IQ100）。

図 2 に示されるように、髪の毛及び耳は欠けているが、目、腕、足が対称性をもちはじめた。これはそれら対称の基軸は胴であるという認識を踏まえたものである。まだ不十分ではあるものの顔の部分と胴の部分の結合性を持たせた「人」を表現しようとし始めてきた。このように二次元可逆操作の操作特性を「人」の描画のなかに含ませて、描画意図と描画動作の連関性が豊に育ち始め、同時に発話行為に対しても積極的な影響を及ぼしていたと推測される。

図 3 は CA4 歳 8 ヶ月の時の Y 児の人物描画である。「人」を表現しようとして、頭、胴、腕、そして足を結合させてきている（MA5:1, IQ108）。また図 4 は CA4 歳 11 ヶ月の時に描いたものである。ここでは特に胴と区別した脚部に着目し、しかも足と区別した描画となっている（MA4:8, IQ95）。



図1 CA3歳7ヶ月時の人物描画



図2 CA4歳5ヶ月時の人物描画



図3 CA4歳8ヶ月時の人物描画



図4 CA4歳11ヶ月時の人物描画



図5 CA5歳1ヶ月時の人物描画

Ⅲ期に入って、Y 児は語彙量を増やしただけでなく、発語に身ぶり（指さし）を随伴させたり、保育者及び友達の名前を呼び、行為主体者としての自己を認識し表現し始めている（CA5：1 の時点では既に自己鏡像認知が照れを伴って把握された）。前者については、保育所での生活及び遊びを通して「デワナイ・・・ダ」という一次元可逆操作的認識を機能させて名詞的分化を重ねたり、要求語を用いて気持ちをつなげてきていることを示唆する。そして、表現語を少しずつ増大させて保育者との対話も行い、二語文的表現を身につけて言語機能における二次元形成を準備していると考えられる。後者では自我の充実を遂げてきており、自分自身を「かっこいい」と言ったり、家族のことを「ママお仕事」「パパお仕事」「ネエネ学校」と言い、身近な人との関係の中で自他分化が着実に進んできている。

Ⅳ期は CA5 歳前後からである。Y 児が CA5 歳 1ヶ月の時に実施した発達検査の結果は、表 5 に示されるように DA3 歳 3ヶ月、DQ64 であった。運動機能は上限に達しており既に二次元可逆操作的に運動方向の転換が可能である。それに対して手指操作機能の発達は DA3 歳 7ヶ月、DQ70 であり、二次元形成から二次元可逆操作の過渡期に達し特に言語機能に対して積極的に影響を与えていたと考えられる。言語・認識機能は DA2 歳 8ヶ月、DQ52 であり、発達の諸機能連関性が促進されている。

言語・認識機能の発達に強く関与していると考えられる手指操作の働きを人物描画から検討する。図 5 に示されるように、これまでに顔の輪郭をはっきりと描き、次に眉、目、耳、そして髪も対称性をもたせて明確に描いている。「人間」への変化はまだ見られないものの、新たに描き加えられた髪の毛や腕と手を分化させていることから「人」の描画に深まりを見せていることがわかる。この描画における深まった意図と手指操作との結びつきは、表 6 に示されるように発話行為の発達にも十分反映されているように考えられる。まず話し言葉におけるコミュニケーション機能の促進である。絵本を保育者に読み、「読み手」と「聞き手」の関係を築くことによって、二次元の対比する世界が作られている。これを基礎にして言葉で問いに答えたり、問いを発したりした。具体的には、問いに対して自分の名前や年齢を答えたり、「（絵本読みの終わりに）もういい」「（お茶を飲むか尋ねられて）いらん」と応答した。これらは話し言葉の二次元の世界を確立したことを証明しているが、より発達した手指操作機能（描画）のレベルでの二次元可逆操作の発達機制に支えられたものである。

表 6 Y 児における発達経過

時期	CA	DA/DQ	描画知能年齢	(MA/IQ)	言語行動	その他の行動	問題行動（備考）
Ⅰ期	1：7	1：7/70			・表出言語なし	・保育者に無反応	・自傷，他害行動
	2：3				・表出言語なし	・集団参加困難	・他児とのトラブル（加配保育者）
	2：7				・発声・ジャルゴン	・絵本に関心を持つ	
	2：10				・クレール行動	・集団事態でウロウロ	
Ⅱ期	3：7	1：10/42	3：6	98	・文字表を指差し保育者に言わせる		
	3：10				・身ぶり言語を身につける		
					・禁止マーク（×）を理解し身振りで示す		
	4：0				・一語文（「キャッキヤ」「ポッポ」「シー」）	・絵本を保育者に読ませる	
	4：4					・絵本のページをめくる	
	4：5		4：1	100		・大型福笑いの表情を変えて楽しむ	

Ⅲ 期	4 : 6					・一語文が増える (「パパ」「ママ」「先生」「やって」「ごめん」「オニ」「まめ」) ・歌う (豆まきのうた) ・一語文に指さしを随伴させる ・二語文で発話する (数語) ・歌う (アンパンマン) ・異なる場所の「×」マークを「ペケー緒」と言う。保育者が「一緒やね」と言うと喜ぶ ・保育者や友達の名前を言う ・主題歌 (鬼太郎) を歌う ・水着を着て「かっこいい」 ・「ママお仕事」「パパお仕事」「ねえね学校」「じいじ」「ばあば」	・友達と手を繋いで散歩する ・保育者に絵を描かせる ・時々集団活動に参加する ・お遊戯会に参加する ・「×」マークの理解 ・友達の歌を聞き、周辺を歩きながら口ずさむ ・わざと名前を間違える ・叱られると靴を持ち出て行こうとする
	4 : 7						
	4 : 8	5 : 1	108				
	4 : 10						
	4 : 11						・「そうめん好き」 ・保育者に絵本を読む ・問われて年齢や名前を言う ・絵本の読み聞かせ後、「おしまい」「もういい」と言う
Ⅳ 期	5 : 0					・お茶を飲む? と問われて、「いらん」と言う ・「プールに行こう」「アンパンマン描いて」「お茶入れて」	
	5 : 1	3 : 3	64	4 : 11	98	・テレビのフレーズを繰り返す ・敬老の日におじいちゃんの絵を描くように言うと、「かけへん」と言う ・「運動会行こう」	・指さし (近い・遠い) 理解 ・鏡像認知 (少し驚き落とそうとする)

(3) 言語行動と人物描画との相関分析

人物描画得点及び表出言語の発達段階を示したものが表 7 である。人物描画得点は DAM (人物描画知能検査) における評価項目得点である。そして言語行動得点とは、太田・永井 (1993) の表象機能の発達水準を参考にして、表出言語の発達段階を操作的に得点化したものである。表 7 を図示したものが図 6 である。表 7 及び図 6 に示されるように、表出言語の発達段階が高次化すれば人物描画得点も高くなる傾向が認められた (傾向検定 $D=2, p<.05$; 相関係数 $r=.89$)。このことは、人物描画における「顔」「人」、そして「人間」への発達が言語コミュニケーションにおける発話行為の発達と強い関係をもつことを示唆する。

表 7 CA における人物描画得点及び表出言語の発達段階

CA	人物描画得点	表出言語の発達段階
3 : 7	4	クレーン行動 (2)
3 : 7	6	クレーン行動 (2)
4 : 0	6	一語発話 (数語) (5)
4 : 1	7	一語発話 (数語) (5)
4 : 6	7	一語発話 (数語) (5)
4 : 8	12	マーク理解 (4)
5 : 0	9	二語発話 (数語) (8)
5 : 1	11	二語発話 (多語) (9)
5 : 2	11	二語発話 (多語) (9)
5 : 2	10	二語発話 (多語) (9)

注) () 内数字・・・発達段階得点, 発達段階得点・・・表出なし (1) クレーン行動 (2) 指さし (3) マーク理解 (4) 一語発話・数語 (5) 一語発話・多語 (6) 一語発話・要求語 (7) 二語発話・数語 (8) 二語発話・多語 (9)

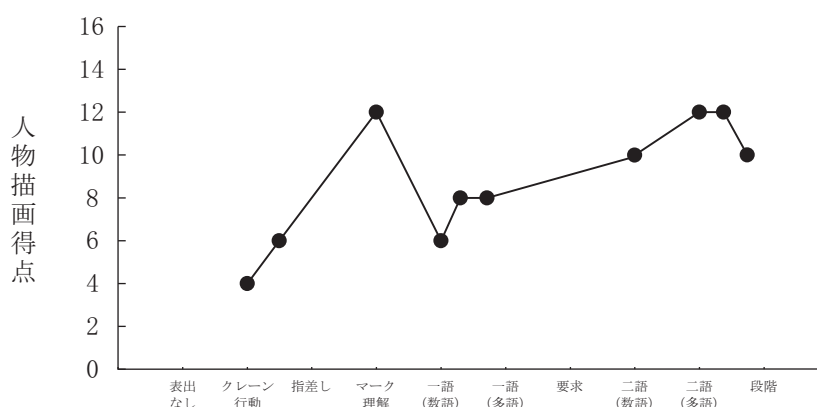


図 6 表出言語の発達段階における人物描画得点

4. 考察

幼児期前期から後期まで集団保育を受けた自閉症幼児の発達を、全体を通して 4 つの発達の区分から言語コミュニケーション及び人物描画の相互関係の視点より考察する。

第一に、入園して一年が経過した時点 (CA2 歳 7ヶ月) で言語・認識機能は他の発達機能に比べて発達の遅れが大きく乳児期後半に達したばかり (0 : 8) であり、表出言語は見られず、多動で集団参加は全くできず、自傷や他害等の問題行動を頻繁に表していた。これは自閉症の 3 つの症状 (黒田・小松, 2007) と一致するものであった。そこで園側では入園後 1 年 3ヶ月後に加配保育者を個別保育担当として配当し、1) 他児とのトラブルを防ぎ、情緒安定を図る、2) 遊びを共有するという主要な保

育目標を設定した。個別事態及び集団場面での加配保育者との相互作用によって、特定の相手の形成が促されていった。Y 児はそこでの物との関わりを特定の相手を通すことで文化的社会的に意味付けられるように少しずつ変化していった（別府，1994）。このことは、象徴機能の発達とも関係し、手段と目的との分化を含むクレーン行動の発生や、指さし行為及び禁止マークの理解へと発展していった。

第二に、特定の相手を形成し言語によるコミュニケーションのみでなく、非言語コミュニケーションの発達を示し始めていることと、手指操作（人物描画）の発達との差異の大きさである。CA3 歳 7ヶ月時、Y 児は人物描画による知能年齢（MA）が 3 歳 6ヶ月であり、CA と同じレベルであった。これは人物描画において、描画表現の意図をもち二次元形成の操作特性を含む手指操作が可能であったことを示唆する。健常児の場合、この幼児期中期における「描画意図」と「操作」のつながりは、言語コミュニケーション（発話行為）の発達と密接な関係を持ち、「問いかけの主人公になり、聞かれたことにも答え、経験したことを伝え、自分の行動をあらかじめ制御するようになりはじめる」（田中・田中，1986）。この点、Y 児では対人相互作用事態で、例えば文字表を指差し保育者に読むように言葉でなく身ぶりで伝えており、健常児と比べると「人物描画の意図」と「操作」のつながりがそのまま言語コミュニケーションには反映されていなかった。Y 児の言語コミュニケーションは指さし行為に代表されるように、意味するもの（能記）と意味されるもの（所記）との分化（象徴機能の発達）が始まってきているところであり、同時に指さし行為（志向の指さしから定位への移行）にみられる共同注意の芽が育ってきているところに特徴があると言える。したがって発達の諸機能連関の観点から、人物描画における「描画意図」と「操作」とのつながりが言語コミュニケーション（発話行為）の発達を積極的に促進していったと考えられる。

第三には、手指操作（人物描画）機能の発達による言語コミュニケーション過程の深まりについてである。CA3 歳後半から 4 歳前半にかけて、Y 児は一語文を多数表出し、友達及び保育者との相互交渉を少しずつ深めていった。集団活動には十分に参加はできていないが、特定の相手との言語コミュニケーションを土台にして集団活動の内容の理解及び自他分化を進展させていった。この時期の一語発話を統語範疇からみると、名詞（「せんせい」「オニ」「ポッポ」など）が最も多く、次に動詞「やって」、形容詞「シ」（静かに）等の語彙範疇も表出されている。屈折辞、決定詞、あるいは補文標識などの機能範疇は示されていない。しかしながら、この 4 歳後半までに 2 語発話の獲得に必要な語連鎖の形成の準備が多くの名詞や動詞の発話を通して発展していたと考えられる。2 語からなる発話は名詞句や動詞句といった句構造から構成される。Ⅲ期では「エーンエーンパンマン」「ママお仕事」「ペケ一緒」などの名詞句を対人コミュニケーション事態で発していた。この言語・認識機能の操作特性は二次元形成であるが、描画活動（手指操作機能）におけるより高次の二次元可逆操作がその活用に強く影響を及ぼしていたと考えられる。CA4 歳 8ヶ月の時、人物描画による知能年齢（MA）は 5 歳 1ヶ月であった。図 3 に示されるように、頭部と胴部を中心に描き、前者には細部としての髪の毛が描かれ、後者には服が着せられている。「人」の描画へと確実に変化していることを示しているが、頭部と胴部とは未だ首でつながっていない。描画の意図を深め、操作につなげて二次元可逆操作の密度を強くしているように考えられる。

Ⅳ期において、Y 児は言語行動の発達をさらに高次化していった。自分から使える話し言葉が増えてきており、しかも使用場所、使用目的、そして使用方法の正確さが増してきた。特に後者については、動詞句を含む 2 語発話が展開し（「プール行こう」「運動会行こう」など）、問いと答えの分化がみられて（「お茶いる？」－「いらん」、「おじいちゃんを描いて？」－「描けへん」）、話し言葉における

2 次元的展開がさらに進んできていた。このような発話行為の発達的变化を引き起こしているのは、ものの性質の二次元的認識（「好きと嫌い」「はじまりとおしまい」）であり、手指操作における二次元可逆の操作特性の活用であろう。人物描画は、鏡像認知を既に形成しつつある Y 児にとって、行為主体としての自己感をさらに高めていたと考えられる。

文献

- 赤木和重（2007）「知的障害のある自閉症児・者の自己の発達と支援」田中道治・都筑学・別府哲・小島道生編著、『発達障害のある子どもの自己を育てる』ナカニシヤ出版
- 別府 哲（1994）「話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達」『教育心理学研究』第 42 巻，第 2 号，156-166 頁
- 黒田吉孝・小松秀茂（2007）『発達障害児の病理と心理』培風館
- 長嶋瑞穂（1981）「自閉症児の研究（1）」『障害者教育科学』3，かもがわ出版
- 太田昌孝・永井洋子（1993）『認知発達治療の実践マニュアル』日本文化科学社
- 田中昌人・田中杉恵（1986）『子どもの発達と診断』大月書店
- 田中道治・松長礼子（1995）「発達の層化現象」清野茂博・田中道治編著、『障害児の発達と学習』コレール社